



第143号

2025年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



ソーシャル・キャピタルとしての大学

お茶の水女子大学教授・副理事 富士原 紀 絵

(H4・3卒)

昨年、研究に必要な情報を得るために、卒業後、初めて同窓会に連絡をとった。自分は卒業論文で取り組んで以来、今日にいたるまで、及川平治という大正新教育を代表する人物のカリキュラムについて研究が続けている。

連絡をした理由は、論文の執筆過程で彼に影響を与えた人物を探していたところ、千葉師範学校出身の石川榮司という人物に辿り着いたことによる。師範学校創設初期の人物ということもあり、得られた情報は僅かだったが、丁寧に対応して頂いたことは有り難かった。

こうして全く予期せぬ経緯で同窓会に連絡をとることになったのだが、これまでも思わぬところで同窓の方に助けていただいていた。

最初に研究職を得て着任したのは秋田大学である。辞令をもらった着任初日に、上司から言われるがまま

県主催の総合的な学習の研究大会に出席し、懇親会まで同席した。懇親会の席で出身大学はどこかと尋ねられ、千葉大だと答えたところ、ある指導主事の方から自分もだと言われ、秋田の教育事情を深く教えて頂いた。それとは別に、卒業論文の指導教員から研究室のOBの方を紹介してもらい、秋田大での学生指導に大変な力添えを頂いた。良い教師を沢山育てたいと希望して就職した教員養成学部だったが二年で去ることになり、お茶の水女子大学に異動した。

異動して直ぐに修士論文の指導をすることになったのが附属小学校のベテランの現職の教師であった。この方の実践研究を担ってもらったのが千葉の小学校に勤める同級生だった。何も知らず指導教員として挨拶に行った際、この同級生から学校の昇降口で開口一番、「なんであんな、

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
趣味アラカルト	8面
学舎の今	8面
海外の教育施設から	9面
教師を目指す施策 バスツアー	9面
定期総会	10面
功労者・永年勤続者の紹介	10面
令和7年度の経常予算	10面
受賞者からのメッセージ	11面
事務局より	12面
物故会員	12面
編集後記	12面

ここにいるの?」と言われ、互いに大笑いし、指導のプレッシャーから解放されたのは今でも忘れられない。一時期お茶大の附属中学校にも同級生がおり、大学時代の学籍番号を忘れずにいるかを確認し合い、メールの署名はお互い学籍番号を書いたこともあった。現在、大学の所在地近くにある公立小学校の学校関係者評価委員をしているが、そこでも一時期、OGが校長で、園芸学部のOBが地域代表で加わっており、大学の話で懇親会はいつも盛り上がった。

研究者は出身大学を尋ねられると、大抵は最終学歴の大学(院)を語る。自分の場合、お茶の水女子大学大学院になるが、今でも正々堂々(?)千葉大と言っている。「大学」を尋ねられたら、それが正確であるということもあるが、これまでの自分の人生の中で、千葉大で過ごした四年間の重みは格別であり、当時ご指導を頂いた先生方、そして同窓の方々に、今現在も様々な場で支えら

れているということがある。

大学の同窓生との結びつき方には「学閥」という特権性を孕む概念もあるが、こうして振り返ると、自身の場合には「ソーシャル・キャピタル」(社会関係資本)の概念の方が当てはまる。大学に通うことは人生のソーシャル・キャピタルを豊かにする。大学が持つこの機能を考えると、本来、多くの子どもたちに進学

冒頭では個人的な研究テーマを取り上げたが、目下の研究の軸は、格差社会の深刻な現実に対し、学校教育として可能な貢献を解明することにある。自身が得てきたのと同様の大学時代の豊かな経験を、それを望む全ての子どもが出自にかかわらず得られるために何が出来るか、これから問い続けてゆくつもりである。



特別寄稿



双子長寿の研究から

大阪大学医学部保健学科名誉教授

早川 和 生

(S 49・3 卒 大阪市)

日本の双子研究は戦前から医学分野で実施されていたが、戦後は東京大学教育学部と医学部の共同研究が始まった。教育学部附属中・高等学校に双子生徒が毎年二十組入学し、学業成績、体育能力、芸術・音楽能力、性格や心理面から長年研究が継続されてきた。この研究は書籍『双生児―五〇〇組の成長記録から』（日本放送出版協会）に詳細が掲載されている。教育学の基盤になる貴重な研究成果が得られている。

当方は二十五年間勤務した大阪大学医学部保健学科で、全国に在住する六十―百五歳の約一万二千組の中高齢の双子を対象に社会医学的な総合研究を進め、長期追跡調査研究を実施してきた。この内三百組については、既に大学病院に来院していただき精密な各種臨床検査、血液検査、体力測定、食品・栄養調査、W A I S 知能検査、人生満足度テスト、M P I 性格テスト等を受けていただいた。

国際的にも高齢の双子を大規模に追跡調査する研究は少なく、ロンドン大学、カリフォルニア大学、大阪大学の三大学が主要な大規模研究を行っている。双子は一卵性と二卵性に分けて数量分析し、各測定項目の遺伝寄与率を算定する。一卵性は一つの受精卵が発生の途中で分離して成長したものである。基本的には全く同じ遺伝子を持っている。かつて日本では双子が生まれると一人を他家に養子に出す風習があったことから、異なる環境で育てられ成長した高齢の双子が数多くいる。遺伝子の同じ人間が別々の人生を歩んだ場合の身体的・精神的な差異を明確に観察研究できるのが大阪大学の高齢双子研究の国際的にも珍しい特徴だ。今後も長期調査が必要だが、生活習慣の差や人生経路の差異が影響していると思われる。

一卵性でも死亡年齢は平均で七―八年の差が見られる。死因についても大多数は異なる死因であり、癌（悪性腫瘍）についても同じ癌になることは極めて少ない。特殊な遺伝病の場合のみ一致した癌の例があった。花粉症やアレルギーは遺伝・体質的要素が強いと一般に思われているが、不一致の割合が高い。またW A I S 知能検査の結果でも、一卵性と二卵性の間では大きな差は見られず、遺伝因子の影響は少ないと判断できる。認知症の発症に関しては未だ例数が少ないが、一卵性でも二人が共に発症した例は無く、片方のみが発症した例は八組あった。なお興味深いことに、頭髪の高齢化による白髪化の程度は、一卵性双子でもペア内で大きく異なり、片方が黒い頭髪でも他方は殆ど白髪化し、大差が見られるペアが少なくない。脱毛（禿）の程度は逆に一卵性ペアでは非常に似ている。脱毛の部位と形は特に似ている。これら遺伝子が全く同じ一卵性の双子における健康度の差異は、遺伝でなく環境因子によるものが多いと推定されることから、関与する環境因子の解明が極めて重要になる。関与する環境因子が詳細に解明されれば、様々な病気を未然に防ぐことが可能になる。

最近の分子遺伝学の発展で、環境因子による遺伝子発現作用への関与が分子レベルで徐々に解明されてきた。エピゲノムの研究分野である。遺伝子は環境因子により活性化されたり不活性化したりすることが解明されてきた。遺伝子にメチル基が作用することにより、遺伝子の働きがスイッチONかOFFになることが解ってきた。

今後は、どの環境因子がどの遺伝子に関与するかを解明するのが予防医学において特に重要になる。なお収集データが少ないので断言できないが、長寿に関連する要因で非常に大きい環境要因は、配偶者の性格が関与しているように感じる。多くの高齢双子の方の来院時の面談中の話から推察すると、配偶者は最大の環境要因かと感じている。心理的・精神的要因が最重要の長寿要因と感づいている。「心」の奥深い大切さを感じる。



生涯野球



濱井 清之

(S52・3卒
東金市)

私の野球歴は三角ベースに始まり、中学で軟式、高校から大学まで硬式でプレーした。高校教員となり四校で野球部監督を二十五年、校長就任後は関東地区及び千葉県高野連の会長として運営に携わった。退職後縁あって還暦軟式野球と出合い現役復帰、現在は某還暦チームの監督兼選手並びに古希チームの選手としてプレーしている。我が還暦チームは三部まで二十七チームある千葉県リーグに

書との幸せ時間



川崎 明美

(S57・3卒
市原市)

墨の薫り、筆と和紙が擦れる音、五感を研ぎ澄まし、ただ無心に書に向かう時間が、私は好きだ。

書は、高校時代の恩師、鈴木方鶴先生との出会いから始まった。先生の穏やかな人柄がにじみ出る作品に憧れ、書道の時間が待ち遠しかった。大学に入学し、なんと先生が書道科の講師であることを知り、書道科を専攻した。久米東邨先生、高澤南総先生、そして鈴木方鶴先生から書道の魅力を学ん

私の趣味



所属、元プロや甲子園球児を多数擁する強豪チームが多くある中で元校長が六人在籍する異色の存在ながら一部残留を維持している。三期前には奇跡的に優勝も経験し、全国大会には四年連続出場中である。古希チームも同様に一昨年一部で優勝、当時新人(笑)の私は六割を超える打撃でMVPを受賞した。

一方で身体の衰えには抗えず日々怪我や筋肉痛と戦っている。今後いつまでプレーできるか不明だが、六十年を超える私の野球人生の集大成として、体力気力の続く限り、一日でも長く継続できるよう挑戦するつもりである。



松井裕樹選手と



だ。多くの時間を書道科で過ごし、充実した大学生活であった。

教員になっても書道とのかかわりを持ちながら、現在に至っている。退職後は、年に数回しか筆を持つ機会はなくなりましたが、書に向かうことは私の幸せ時間となっている。と同時に、自分の生活や心持ちを見つめ直す時間でもある。

退職後の生き方・親の介護に直面すると様々な感情が表れてくる。そんな時、書の作品づくりを通して心を整えていることに気づいた。

これでよし！と自分が納得できる生き方を書との時間の中で求め続けていたら幸せである。

生涯にわたって音楽とともにある人生を

教授 本多 佐保美

音楽科教室は、小中専門教科コースに属し、現在の学生定員は一学年十五名、学部生・大学院生あわせておよそ六十名の学生が在籍しています。教員は声楽の久住先生、器楽(ピアノ)の揚原先生、音楽科教育・ピアノの竹内先生と本多の四人体制です。教育学部全体の教員数減少に伴い、音楽科教員も定年教員の不補充が続き大変苦しい状況ですが、そんな中でも特に実技レッスンを一年次から四年次まで継続し、一人一人を丁寧に見るきめ細かな指導の伝統を保とうと頑張っているところです。

学舎の今

音楽教室から

ば北欧の特別支援教育視察や、オーストラリアの大学における語学留学等)に参加したり、あるいは学生が自主的に計画したプログラムを実施したりしています。ある学生たちは、ウィーンやプラハに赴き、当地にてオペラ鑑賞や教会での演奏会に参加したり、作曲家ゆかりの地を訪ねたりして、現地における西洋音楽のあり方をまるごと体験するという得難い経験をして大きく成長して帰ってきました。

附属小・中学校との連携をしっかりと行っているのも、音楽科の特徴の一つです。一年次のスタートアップ実習やセレクト実習等で、附属学校の授業を参観することは、音楽の授業のつくり方や、教師に必要な力について学生が深く理解する場となっています。附属学校と大学との連携研究を継続的に行い、毎年開催される公開研究会の共同研究者として関わり、そこでの成果を教科教育法など学部の授業に還元しています。

音楽のもつ力で子供たちを育てたいという大きな志をもち、日々、私たち自身も音楽のもつ力を実感し、楽しい時も苦しい時も音楽とともにある人生を、大学を卒業したあともずっと続けてほしいと願って、毎年卒業生を送り出しています。



揚原教授によるピアノレッスン

私はチカラン日本人学校に勤務している。チカランは、インドネシアの首都ジャカルタから東に五十キロメートル離れた場所にある。そして、私の勤務しているチカラン日本人学校は、二〇一九年四月に開校された開校七年目の学校である。

私は、大学四年生の時に、チカラン日本人学校で、二週間のインターンシップに参加した。それをきっかけに、新卒一年目から日本人学校で勤務しようとして決断した。現在、私は小学三年生の学級担任をしている。一学期を振り返ると、インターンシップ参加時には見えなかった日本人学校の一面を知ることができた。

まず、インドネシアならではの工夫である。日本人学校では、限られた教材や教具の中で教育する必要がある。運動会では、インドネシアという環境を生かし、インドネシアの伝統衣装「バティック」を衣装の一部として使用したり、限られた教具の中でできる競技を考えたりする等、日本人学校ならではの工夫をすることができた。

また、学校内での多文化共生の姿

海外の教育施設から

チカラン日本人学校に派遣されて

神原 歌恋 (R7・3卒)



勢に感銘を受けた。本校には、日本各地や外国から来た子供、現地で生まれ育った子供、国際結婚家庭の子供等、多様な環境で育った子供たちが同じ教室で学んでいる。そのため、子供たち同士で「ちがいがい」が見えることが多々ある。しかし、異文化の中で暮らす仲間として、その「ちがいがい」を当たり前であると認識し、相手の価値観を受け入れようとする姿が見られる。

また、本校ではネイティブによるインドネシア語の授業や、現地人スタッフと連携等を通じて、日々、異文化理解に努めている。

またプライベートにおいても、現地の方との交流等を通じて、異文化を理解する面白さを感じ、充実した日々を送ることができている。

チカラン日本人学校での経験は、自身の教育観や価値観の形成に大きく影響を与えているだろう。そのため、今後も日本人学校ならではの良さや工夫、現地の文化を学んでいくとともに、本校の子供たちのために奮闘していきたい。



千葉大OBOG(現職教員)との交流



教室で活動



遊んでほしいと囲まれます

学生からも大好評の教育学部バスツアーを紹介する。令和五年度から一・二年生を対象に実施しているこの事業は、多くの学生が教員を目指すことを目的として実施されている。千葉大学教育学部が千葉県教育委員会から指定を受け、今年度で三年目。日帰り又は宿泊希望者を募り、千葉県内の小学校・中学校・教育施設での体験ツアーである。定員百五十名が募集開始から一時間ほどで埋まってしまうほど学生から好評である。これまで、東上総・北総・南房総方面の小学校・中学校・博物館・県総合教育センター等の体験及び視察を行った。以下、この体験をした二名の現役学生の体験談を紹介する。

(文責 水野 平吾)

教育学部バスツアー



学校体験バスツアーの体験を通して、実習ではあまり行くことができない北総地区の小学校に行くことができた。一日だけの参加でしたが、実際の授業を見て、自分が大学で専攻している算数に加えて家庭科などのあまり見ることができない教科も学べました。また、休み時間を通して、児童と積極的に関わること、一日でも子供の成長を感じることができ、教員になりたいという気持ちが強くなりました。

(四年・仙波 陽菜)

大学二年次での学びから、レベルの高さを感じ、教職に対して漠然とした不安を感じていました。しかし、バスツアーに参加し、算数が苦手な子に個別で教えたり、ロング昼休みに子供たちとドローイングをしたりなど、子供たちと関わる中で、子供との関係性を作ったりと深めたりする楽しさや喜びを感じました。その学校の先生から、教職のやりがいについて話を聞くことができて、教職への志望の思いが高まりました。これらのことから、それまで持っていた漠然とした不安が消えて、教職につくために頑張りたいという意欲が湧きました。

(四年・山口 侑夏)